

5・4 尾張八幡神社

八幡神社本殿

八幡字荒古後八七の八幡神社は譽田別命（ほんだわけのみこと）、息長帯姫命（おぎながたらしひめのみこと）、玉依姫命（たまよりひめのみこと）の三柱を祭神とし、法海寺の鬼門鎮護のため創建されたと伝えられる。本殿は貞享二年（一六八五）の造営で、身舎（もや）一方に庇（ひさし）を付加したいわゆる三間杜流造り、桧皮葺きである。向排の庇は四本柱で浜床をもっている。浜床は身舎柱、庇柱を連結する足固めの貫の上に張られ、更に庇柱の足許を安定させるために浜縁がその外にまわる。柱は礎石建てであるが、浜床だけは土台を設けている。身舎の縁は側面後方に脇障子を建てて背面を省略し、脇障子には鶴亀の彫刻を施し、縁には勾欄を廻らしている。扉は中央間のみであるが、前室の建具は菱格子となっており、極めて開放的で軽快な感じを与える。両脇は板壁、軒は身舎、庇とも繁垂木で、組物には舟肘木、墓股が用いられ、桃山時代の影響が残されている。

昭和二年に改築の案が進んだおりに、県の文化財保護の専門委員であった土屋博士から、現状のまま保存すべきであるという指導があり、そのまま腐朽した部分のみの修理を施して保存することを決め、拝殿などの改築工事が進み、昭和六年におこなわれたご遷座の時にも、江戸時代初期の建物として完全に維持できたという、八幡神社の本殿には文化財の保存について歴史的な経緯がある。

貞享の棟札には、本殿造営のおりの寺本四か村の庄屋一同の名が連署してあり、地域の産土神としての鎮座を示している。祭神も中心は譽田別命すなわち応神天皇であり、古くから武勇の神として知られている。

また本殿の基壇となっている石組は、いわゆる城積みといわれる石工の技術によって組まれていて、氏子の農民の得意とする伝統的な、黒鯨の石工技法である。市指定文化財。



八幡神社本殿

八幡神社の祭礼

八幡神社の祭礼は、寺本四か村の祭である。寺本四か村というのは中嶋村・平井村・堀之内村・廻間村のことである。

いつの時代か不明であるが、堀之内村から荒井、中嶋村から小根・浜小根・荒古・平井村から杉山と出郷のような形で人々が住みつくようになった。開拓とともに平井村も拡大するにつれて、上ゲ平井・西平井と分けて生活が行われるようになった。従って祭も大規模なものとなった。現在は荒井・荒古・堀之内・廻間・中嶋・中小根・浜小根・西平井・上平井・杉山の十組によって祭がとり行われている。

八幡神社は、平井村の法海寺の鬼門鎮護のために創祀されたと伝えられ、同寺の僧によって永らく祀られてきた。宝永年中より下村氏が神宮となっている。八幡神社は、関ヶ原合戦の折に、九鬼大隅守の水軍によって災上され、貞享二年（一六八五）に本殿が造営されているが、創立年月日は不詳である。

祭 神

息長帯姫命（おぎながたらしひめのみこと）

譽田別命（ほんだわけのみこと）

玉依姫命（たまよりひめのみこと）

祭 礼

歳旦祭 一月一日

祈年祭 二月中旬

輪越の被 七月三十日

例 祭 十月十五日（十月第二日曜日）

新嘗祭 十一月下旬

大 祓 十二月三十一日

後掲「八幡宮祭礼の図」（宝暦五年）に「例年八月十五日」と記されているとおり、旧八月十五日に祭礼がとり行われていたのである。現在は氏子の勤務の都合で十月の第二日曜日にとり行われている。

知多市誌より転載

（昭和五十八年発行）



息長帯姫命	第十五代応神天皇の母・神功皇后 軍事の神様	国土平定など
譽田別命	武神。文教の祖神 第十五代応神天皇のご神霊	国家鎮護 勝運招来 殖産興業など
玉依姫命	第一代神武天皇の生母	開運招福 家内安全など

宇佐神宮（八幡さま）

九州・国東半島の一角にある宇佐神宮は別名を「宇佐八幡宮」という。八幡宮の名の通り、ここに祀られているのは八幡の神通称「八幡さま」の総本社だ。

伝承によれば、仏教が日本に渡来した欽明天皇の時代、宇佐の御許山に突如として八幡神があらわれ、五十七年、菱形山に神霊が出現する。「われは嘗田天皇広幡八幡麻呂なり」と告げたという。その神霊が応神天皇だが、以来この地に天皇を祀るようになった。宇佐神宮のはじまりだ。

東大寺の大仏造営時、聖武天皇はここに使者を送って祈願したが、大仏完成後、八幡の神は都に迎えられ、東大寺鎮守八幡宮が建立される。今、東大寺の近くにある手向山八幡宮がそれだ。八幡の神は都にデビューし、朝廷を守護する神となった。

その後、八幡の神は武士たちに信仰され、各地に八幡宮が出現する。源頼朝が建立した鎌倉の鶴岡八幡宮はその代表格だ。やがて「八幡さま」「村の鎮守さま」として親しまれるようになる。その数は、三万五千社を超すという。